

誰のためにベースは鳴
る

ほおずきん

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

何か一つのこと熱中する。

それは簡単なようで難しいことなのかもしれない。

何かに熱中する自分を見つけることができたその先に見えるものとは――

これはそれぞれ熱中することをみつけた幼馴染2人の恋愛ストーリー。

目次

| | |
|------------|----|
| 俺と音楽と幼馴染 | 1 |
| 帰り道と幼馴染 | 12 |
| チヨコレートと幼馴染 | 24 |

俺と音楽と幼馴染

『幼馴染』それはお互いが幼少期から顔見知りであり、家族よりも多くの時間をともにすることがあるかもしれない。そんな密で濃い関係のことを言う。

男同士、女同士でも幼馴染と呼ばれるらしいが、男女の場合が多くだらう。

小学校で幼馴染と仲良くしているのを見るとクラスの一部の男子が、「お前ら付き合ってるんじゃないの？」などとからかってきたり「そんなに仲がいいなら早く付き合っちゃえよ！」と交際をそそのかしてきたりといじりの対象になることがしばしばである。

俺も幼馴染とそのいじりを経験してきた一人だった。

当時小学生だった俺には幼馴染への恋心などは微塵もなく、“ただ家が隣のよくしゃべる友達”としか考えておらず、いじりに対する対処も適当に受け流して笑っていただけだった。

やがて時は過ぎていき中学校へ進学する年齢になると幼馴染は女子校へ、俺は共学校へと進学してしまい俺たちは学校で顔を合わすことはなく高校進学まで時が過ぎ去ってしまった……

—— 第1話『俺と音楽と幼馴染と』

—— 2年前

「ねーしゆう！ 窓開けてよー！ 大事な話があるんだよー」

2階の自室で休んでいた俺の耳に聴こえてきたのは窓をドンドンと叩く音、それと窓に音が遮られ小さな声で何か喋っている幼馴染の顔。

俺は立ち上がり窓を開けようと足を進め幼馴染へ一言。

「今は漫画を読んでるんだ、後にしてくれ」

ピシヤリと窓を閉めてカーテンを勢いよく閉じる。よし邪魔者もいなくなったことだし快適に漫画が読めるな。

カーテンを閉めるときに一瞬幼馴染の涙ぐんだ顔が見えた気がしないでもないが大丈夫だろうか……いや気のせいだろう。

俺はその場に座り込んで読みかけていた漫画に手を伸ばす。するとまたもや窓がドンドンと鳴り響く。

無視してもドンドン……さらに無視してもドンドン……その音は回数を増すごとに

強くなつていき、我慢できないほどの音量になつていった。

「だー！　うるせえ！　集中してマンガ読めねえじゃねえか！　それに近所さんに迷惑だろうが！」

再び立ち上がり文句を言つてると窓を開けた瞬間に「スキあり！　とおうつ！」と幼馴染は部屋へと飛び込んできた。

部屋へと飛び込んできた幼馴染の名前は『上原　ひまり』

ひまりは俺と幼馴染であり、家が真隣にある。こうしてなにかあると必ずと言つていほどベランダをつたって俺の家のベランダへと侵入し窓を叩いては俺を呼び出す。

いつか不審者として通報してやろうか考えたこともあるくらい頻繁に訪れる。

ひまりはなかなか明るいい性格で周囲を盛り上げたりすることがとてもうまい。

ただ一つだけ空気が読めないという難点があり、さきほども俺がごろごろしているところを窓越しにがつつり見ていたはずなのに部屋に上がり込んできやがった……なんつー空気の読めないやつ。いや俺の心が狭いとは言わないでくれ……自分の時間を邪魔されるのが大嫌いなんだ。

ついでに付け加えていうとひまりは感動系のエピソードに弱くてすぐに泣いてしまうという涙もろく可愛い一面もある。

先日も子猫が飼い主の家に帰るドキュメンタリーを視聴しておいおい号泣していた。

これはもちろん難点ではなくむしろプラスポイントだ。

可愛い女の子が可憐に泣いている姿、抱きしめてあげたいよな。

……抱きしめたことないけど。

そしてそのひまりに『しゅう』と呼ばれている俺の名前は有地 柀史（ありち しゅうじ）

何の変哲もないそこら辺にいる学生だ。

「で、ひまり、何の用だ？ 俺マンガ読みたいから早くしてほしいんだが」

俺がこういうとひまりは頬をむうーつと膨らませてプンプンッなんて効果音が出るような表情で俺に問いかけてくる。可愛い幼馴染のこんな一面も見れるとはやっぱり幼馴染は役得だな。

「もー！ いったいしゅうはマンガと私どっちが大事なの！」

なんだ、いったい何を聞いてくるかと思えばそんなくだらない質問か。新婚さんじゃないんだからまったく、それはもちろん……

「マンガに決まってるだろ」

そんなうふふなことを思いながら俺がマンガと答えるとひまりはすかさずツッコんでくる。

「返答はやつ!! まさか私マンガに負けたのっ!! うう……」

いいツツコミだ、やっぱひまりは漫才の才能あるなあ……

「つて! 私が大事かマンガが大事かなんてそんなことはどーでもよくてさー私バンド始めたんだよ!」

結局どうでもいいのかよ……ちよつと涙浮かべて泣きそうになってたくせに。

マンガをだらだら読みながらも俺はひまりの言葉に耳を傾け、問いかける。

「バンド? バンドつてもしかしてあのギター弾いたり歌つたりの?」

「そうそう! ギター弾いたり歌唄ったり!」

そういつているひまりはとても楽しそうにそして嬉しげに話していた。チラツと見ると案の定ひまりは楽しげな様子だった。

バンドと聞くと男性グループが主で女性がいたとしてもグループに一人いて、その人たちがテレビ出演などをして活躍しているイメージが強いのだが最近はそのようないらしくグループ全員が女性でそれぞれかつこよくギターを弾いたりドラムを叩いたりし、メディア進出をしているらしい。

「で、メンバーは誰なんだ? またいつも通りのメンバーか?」

いつものメンバーとはひまりのほかに4人女の幼馴染がいて幼馴染5人組をいつものメンバーと俺は呼んでいる。

「よくお分かりで！ ほら、前に相談したでしょ？ 蘭がひとりだけ別のクラスになっちゃって学校の授業もサボりがちでどうしよう……って。それでねしゆうにいろいろ考えてもらったり蘭以外のメンバーでどうにかできないかなって考えたりしてどうしようかって思ってたの」

一度だけがひまりに蘭について相談を受けたことがある。今まで幼稚園、小学校と幼馴染全員で同じクラスになっていたのだが、中学校進学で俺が離れ、今度は中学2年のときに蘭だけクラスが別になってしまったのだ。

これがきっかけで蘭はクラスに居場所を見つけれなくなってしまい、授業をサボったりしてしまったらしい。もちろんこいつらが放っておくわけもなく心配してなにかみんなでもやり始めようという魂胆らしい。

「んでみんなのできることがバンドっていう答えに行きついたのか」

「そうだよ！ 私たちみんな初心者だけどみんなとならなんでもできる気がするよー」
なんかいつも行き当たりばったりで行動するやつらだったからあまり変わってなくてこちらまで微笑ましくなってしまうな。

「最初はね軽い気持ちでモカと私でひーちゃんバンドなんて言ったら……つぐが『部活とかで忙しいかもしれないけどみんなで一緒に何かやったら蘭と一緒に時間増えるよね！』って言ってくれてさ！」

「へーよかったな、またみんなでいろいろできて」

「うんっ！ それでねそれでね！ ギターボーカルが蘭でーギターがモカでしょー巴がドラムやるって言うててーつぐがキーボード！」

蘭ってば一人で歌詞書いてたんだよ、すごいよね！ とか巴って商店街で太鼓叩いたりしてるでしょ！ とかつぐは昔ピアノやってたしキーボードぴったりだよね！ なんて言うてた。

ひとりひとり幼馴染の名前を挙げていき担当楽器を説明してくれたひまり。

「へえ、じゃあ余ったお前はベースってことか」

「余ってないよっ！ ちゃんとみんなと話し合って決めたんだよ！」

そう言うているので今日のところはそういうことにしておいてやろう。

先ほど挙がったいつものメンバーはひまりだけでなく俺とも幼馴染だ。

小学校までは6人全員クラスが同じでいつも6人で行くことのほうが多かったが、中学生になった今は家が隣のみまりとしか喋っていない。

まず最初にギター&ボーカルをやると言っていた美竹 蘭。

彼女は100年以上も歴史のある華道の家元の一人娘に生まれた子で跡継ぎを期待されているが本人はさらさらそんなつもりはないらしい。学校をさぼっていた時期も父親と一悶着会ったらしいが何とかなつたみたいだ。時折照れる姿がとてもかわいい。

続いてギターの青葉 モカ。

非常にマイペースな性格で蘭とモカは6人の中で一番仲がいい幼馴染といえるだろう。特に人の上げ足を取るのがうまく、よくほか4人をいじって遊んでいる節がある。

3人目は宇田川 巴。

彼女は他人を悪く言ったり恨むなど絶対しないやつだ。いわば姉御肌というやつでもしかしたら俺よりも男らしい一面があるかもしれない……

なんかというか俺も見習っていききたいな。

4人目は羽沢 つぐみ。

彼女は普通の女の子といっても過言ではないほど突出したところは見られない。しかし彼女は人一倍努力家で前向きである。

俺たちは彼女の努力を一番近くで見ていると言ってもいいだろう。他人が見て頑張りすぎないように言われているのを初めて見た人物でもある。

5人目の上原 ひまり。

先に言った通り可愛くて、とても真っ直ぐな女の子。

そして重要なのがこの女の子『上原ひまり』

——— どうやら俺はコイツに恋をしているみたいだ。

この恋に気づいたのは中学へ進学してひまりがバンドを始めると聞いてからのことで、いつから好きになったのかはわからない。それが小学生の時なのかそれとも中学で離ればなれの学校になったからなのか、はたまたひまりがバンドを始めると言った瞬間からなのか。

当時なにも熱中することがなかった俺にはベースを買って部屋で一生懸命苦勞しながら弾いているひまりがあまりにも輝いていて眩しかった。ただただ真つすぐに突き進んでいるひまりに憧れていたんだ。

そんなひまりを2年間も指をしゃぶってみていた俺はある決心をした。

自分も何か熱中できることをしよう。

ひまりの一生懸命な背中を追いかけるように俺も何か始めようと思ひ高校進学とともにラグビーを始めた。

ほかにもボートや卓球、剣道に弓道初心者にできそうな様々な部活があったがラグビーを始めようとしたきっかけは、面白そうだったことが一つ。それとかつこよくなりたかったからだ。

中学の時俺をよく面倒見てくれていた先輩も同じ高校のラグビー部に所属して

中学の時とは見違えるほどがっしりとした体形、程よい筋肉質になっていて俺もそんな風になってみたいと思ってしまうのだ。

本心はもちろんムキムキになったらひまりが好きになってくれるだろう。とかいう安直な考えなんだが……

幸い俺の高校では経験者はおらず初心者ばかりなのでそういうところも理由にすんなりと入部することができた。

もちろん先輩も俺の入部を歓迎してくれた。

そしてこのラグビー部へ入部するときには俺は初めてひまりを頼った。

それまで俺がひまりの家に現れたことがなかったからか窓をたたいた時にカーテンを開いたひまりがお化けを見たような顔なのか不審者を見た時のような顔をされた。

一応なんとかその場を収めることができ、ひまりに相談を持ち掛けた。

相談したときはまだ体験入部の時で『えー！ しゅうがラグビー!? 大丈夫なの？ 吹っ飛ばされたりしない？ 絶対痛いよー』

なんて馬鹿にされもしたがひまりは俺の不安にも真剣に答えてくれた。

今考えるとあれも心配してくれていたのかもしれない。

それから部活で心配になった『やっぱり俺身体細いし大丈夫かなあ』なんて悩みを言えど『人一倍食べてほかの人より大きくなろうよ！』だとか、『しゆうならやれるよ！』なんてひまりはどんなネガティブな俺の言葉も全部ポジティブに置き換えてくれて不安な俺を励ましてくれた。

この太陽のようなひまりの存在が俺を大きく変えてくれたんだ。

このとき俺もひまりを照らす太陽になろうと決心したんだ。

帰り道と幼馴染

——第2話、帰り道

キーンコーンコーンコーン

「じゃあ今日の学校はこれでおしまい。気を付けて帰るんだぞ」

放課後を知らせるチャイムとともに先生の帰りのあいさつが終わった。結構な時間
ぺちやくちや連絡やら世間話をながく話していたがようやく家へ帰ることができ
る。

ん？ 部活はどうしたんだって？ 大丈夫、ラグビー部は毎週火曜日に部活が休
みに
なっている。

基本的には日曜日に練習試合をして月曜日に筋力トレーニング、火曜日に筋肉また
は
全身の疲れを取ろうという顧問の意向により毎週火曜日がラグビー部定期休
みの日
となっている。顧問は超回復がどうたらこうたらなんて言っていたが難
しい話はわ
からないので右から左へ流しておいた。

さて、週に1度しかない休みの日なのでもちろん有意義に過ごしたい。

「じゃーなー」「また明日なー」

新しく高校でできた友人たちと一言二言かわし、その場で別れを告げ、帰りの支度を

した。家に帰ったらラグビーの動画を見てタックルの勉強でもしようかな、とかそれとも今日新しく提出された宿題を早めに済ませておこうかな、なんて思っていると……

「あー！ やつと来た！ 一緒に帰ろーよ、しゅう！」

校門を出ると目にとまったのはひまりの制服姿だった。ひまりたち俺以外の幼馴染組は羽丘女子学園という女子校に通っている。

羽丘女子学園の制服の特徴はネクタイとスカートが緑の基調となっていてその上にブレザーを羽織るといった形になっている。

そんな制服姿で待っていたひまりを見たうちの学校の人たちは少しざわざわしていた。大方『彼女じゃない？』とか『リア充爆発しろ』とかいう言葉だろうな。残念だが彼女でもないしどちらかといえば俺も『リア充爆発しろ』側だ。

ただ一つよかったなと思ったのは夕日に照らされたひまりの姿がとてもきれいに見えたことだ。

いやもちろん可愛いのはいつもの事なのだがなんだか雰囲気と風になびく髪がひまりをより可愛く、美しくさせていた。

俺の胸がドキンと高鳴ったのが自分でも感じる事ができた。顔がどんどん赤くなっていくのも手に取るようにわかる。

「よ、よお。な、なんでひまりがここにいるんだ？」

動揺して声が上ずってしまった。

そして未だに抑えきれない胸の高鳴りと顔の赤らみを隠すように俺は下を向いてひまりに向けて喋った。

赤い顔なのはばれていないだろうか……とりあえずこのまま何事もなく時間が過ぎるのを祈るだけだ……

「いやーたまたまバンドの練習も部活も休みでさ！」

説明が遅れたがひまりはバンドだけでなくテニス部にも所属して掛け持ちをしている。

俺はラグビーと学校の勉強でいっぱいだったっていうのにひまりは部活にバンドに勉強、かなわないな……

まだまだ顔の照りが冷めそうにないので下を向いて待っているとひまりはそのまま続けて喋った。

「それでね！ そういえばしゅうも火曜日休みだったなーって思いだして、待ってたら来るかなーって！ ってどうしたの!? 下向いて……まさかお腹でも痛いのか!?」

もちろんそんな俺の儂い祈りも届くことなく、ひまりは俺の気持ちも知らずに顔を覗き込むように聞いてくる。

また目の前にはひまりの顔があらわれて恥ずかしさのあまり紅潮してしまう。やつ

ぱりこいつ空気読めねえな……

「い、いや！ 大丈夫！ 大丈夫だからさ！ 気にすんなよ！ ほら、この通り！」

俺が慌てて顔をあげ体調の万全を報告するようにマッスルポーズをとるとなぜかひまりも急に慌てた。

「ええっ!?! しゅう顔赤いじゃん！ やっぱり全然大丈夫じゃないよ！ 早く帰らなきゃ！ 大丈夫？ 歩ける？」

そういつて俺を心配するひまりは手をとって帰り道を走り出す。

ひまりの手は俺のごつごつしたような怪我だらけの手とは全く違ってとても柔らかく、そして優しく包み込んでくれるようだった。

すらつと伸びてきめ細かやかな指。傷一つなくまさに女の子というのにふさわしい手。

そんな素晴らしい手に握られているとふと考えるだけでまた自然と顔が赤くなってしまう。

「わわっ！ さつきよりもまた赤くなってる！ これはやばいかも……ちよつと熱測るね」

俺の顔がさつきよりも赤くなっていたらしくひまりは走るのをやめてそういつてひまりが顔を近づけてくる。“まさか”とは思うがおでことおでこをくつつける熱の測

り方なのか……？ そんなマンガみたいなことあつていいの？

俺が覚悟を決して目をつぶって待っているとひんやりとした感触がおでこに触れた。

ゆつくりと目を開けるともちろん“まさか”なんて起きているはずもなく、当たり前のようにひまりの手が俺のおでこに触れていた。

いや、もちろん好きな人の手がおでこに触れているだけでうれしい状況なんだが……
あ、いや期待してたわけじゃなくてだな……

「あつつつつつつ……い!!!」

俺が必死に自分に問いかけていたら、ひまりが急に悲鳴を上げだした。俺のおでこがよほど熱かったらしく今も手をフーフー冷ましている。

嘘だろ!? って思つて自分でも頭を触つてみるとそれはもうアツアツに熱された鉄板を触つたような熱さだった。

周りを歩いていた近所のおじいさんや犬の散歩をしていた人は一体何が起こつたのか言わんばかりの表情でとこちらを見ている。まさか赤の他人にまで俺の紅潮した顔を見られるなんて……今後生きていけないかもしれない。

つとそんなことよりひまりがすごい悲鳴を上げていたからこんなことになつたんだつた。

「ひまり、大丈夫か……？」

「ううー……だ、大丈夫なんだけど、しゅうはなんでこんなに熱くなるまで頑張ってたの？　とりあえずすぐ家帰るよ！　看病してあげるから！」

そういつてひまりはまた俺の手をぎゅつと握って走り出す。

俺の通っている高校は家からそれほど遠い距離ではないのですぐに到着するのだが、俺はまだまだこの幸せな時間をもっと過ごしていたいと思ってしまった。俺の手を引くひまりをそのまま立ち止まり引きとめた。

「ひまりー　俺の顔は熱いけど、風邪はひいてないから！　この通りピンピンだからさ！　ほら、その……ゆつくり帰らないか？」

顔は熱いのに風邪はひいてないって事情を知らない人からすれば何を言っているかわからないと思う。

けどこの幸せな時間を長くするためにはこれしかなくて、これくらいしか言えなくて。我ながら強引だとは思ったけど動揺してた中で考え付いた言い訳はこれが限界だった。

「そ、そうなの？　しゅうがそういうならいいんだけど……じゃあゆつくり歩いて帰ろっか！」

案の定ひまりは困惑してたが一緒に帰る時間を延ばすことに成功することはできた

のでよかった。

少し歩くと手が少しじわつと汗をかいているような気がして、なんでだろうと思つているとふと手のほうへめをおとすとまだつないだままの手を目で確認できた。なんたかい匂いが近くからすると思つたら、こういうことだったのか。

「で……ひまり、この手どうしようか……」

「あわわわわっ！ ごめん！ いやだったよね！ すぐ離すから！」

俺が手を胸のところらへんまでもつていきどうしようかひまりに尋ねるとひまりも慌てて手を振りほどいた。

ひまりの手の感触がとても名残惜しく感じてしまい、言わずに家までこのままずつと手をつないでいればよかったなと思つた。手もつないでいればさつきも言つたようにお互いの距離やおいも近いわけで、手を振りほどいたひまりの顔がとても近くにあった。お互い一瞬目が合ったがすぐにそらしてしまった。後から考えたら俺は汗臭くなつたかなと考えたりもしたけどその時はそんなこと考える余裕もなく、ひまりからするいい匂いを何とか感じたりチラツツだけひまりの顔を見るので精いっぱいだった。チラツツとひまりのほうを見たときひまりはなぜだか頬を赤く染めていた。

「なんかひまりも顔赤いけど大丈夫か？」

「……」

返事がないな……もしかしてひまりも急に風邪でもひいたのか？ いやこんな短期間で風邪なんてひくわけないか、夕日にでも照らされて顔が赤く見えたんだろう。

「ひまり？ ひまり!!」

「は、はいっ!!! あ、しゅうどうかした？」

俺がちよつと声を大きくしてひまり呼ぶとようやくひまりが反応してくれた。授業中に寝ていて先生に起こされたくらいにいい返事だった。

「どうかした？ じゃねえよ、何度呼んでも返事がないから……大丈夫か？ ひまりも疲れてないか？」

「う、うん！ 大丈夫だよ！ なんともないよ！ あ、あはは……」

何でもないと本人は言ってるがどうも大丈夫そうには見えない。ただ俺もさつき同じ状況だったのでそのままひまりに対して何もできなかった。

そのまま無言の状態が10分ほど続き結局何もできないまま家の前まで来てしまった。

いや、無言というのは正確ではなくて会話という会話をするのができなかった。

会話がないう状態から俺が勇気を振り絞って『最近バンドどうなんだ?』って聞けば、『うん! 普通だよっ!』とか逆にひまりのほうから『しゅう部活楽しい?』なんて聞かれても変に意識してしまつて『おう、楽しいぞ』とか一言二言で終わる会話ばかりで話を広げられなかった。

無言の時も俺はどうか会話できないかとか、さっきの会話をまた持ち出したら変に思われてしまうかな、なんて考えていたらいつの間にかお互いの家についてしまった。ということだ。

「さて、家に着いたし今日はここでお別れだな」

俺がひまりと別れを告げようとするとひまりは何か不思議なものを見るような顔でこちらをみつめた。

「んー……ほんとに看病しなくて大丈夫? しゅうのおでこ、感じたことのない熱さだったけど……」

また校門での出来事が思い出されて顔が赤くなつてしまいそうだったのでなんとか抑え込んだ。

「だから大丈夫だつて言ってるだろ? 心配するなつて。それよりひまりも手は大丈夫か? やけどとかかしてないか?」

俺が心配するとひまりはニコツと笑つてみせた。

「うんっ！ 大丈夫だよ！ なんかあんなに熱かったのになんともないし！」

よかった、なんともないらしい。自分も確かに触って熱かったはずなのになんともなかった。

「じゃあここでお別れだな、バンドに勉強にいろいろと頑張れよ。また一緒に帰ろうな、ひまり。」

「うんっ！ しゅうもほかの部員の人に負けないようにラグビー頑張るんだよ！ 私にいつかかっこいい姿を見せてよねっ！ バイバイ！」

かっこいい姿をいつか見せてなんていわれてまた心臓がドキッと鳴った。今日だけでひまりは何回ドキッとさせるつもりなのだろう。やはり空気が読めないらしい。

とりあえずその場でひまりに手を振り、家に入っていくのを見送った後俺は一目散に家へと入り自分のベッドへと飛び込んだ。枕に顔をうずめて足をバタバタさせていた。

これで俄然ひまりにかっこいいところをみせてやろうと決心が固まった。明日からめちやくちや頑張ろう。

どうやらベッドに飛び込んだまま寝てしまっていたらしい。日頃の疲れだろうか、結構な時間寝てしまっていたみたいだ。

まだまだ眠かったので今日の晩御飯は諦めてもう一度寝ようかなとベッドに身体を預けるとなにやらベンベンベン……と微かに音が聞こえた。

この音には聴き覚えがあった。ひまりのベースの音だ。

俺はベッドから降りて立ち上がり、窓からひまりの部屋を覗くとベースと楽譜と必死ににらめっこをしているひまりが見えた。

なんだかこうしてひまりを見ていつも自分がみじめに感じてしまう。

明日から頑張ろうと決心して満足していた自分がとても恥ずかしいからだ。明日の部活から真剣にやろう。明日の学校の授業から真剣に受けよう。もちろんそう思うことは大切だ。しかし、行動に移さなければ何も意味がない。思うだけなら幼稚園児でもできるからだ。俺は行動に移すことなくひまりは行動に移している。

ひまりは今の状況に満足することなく先を見て歩き続けているのに俺は休みだからと言って気を抜いていた。

ひまりは休みの日を生かしてベースの練習をしている。俺は相当な時間寝ていた。

もしひまりが家に帰った時点でベースの練習をしていたとしたら、どんどんひまりは歩き続けて遠く離されていることになる。

そんなひまりに追いついてひまりの隣を歩いてかつこいいところを見せてやろうと
なんて甘い考えだ。

そう思った俺はベースを弾いているひまりを見た後にリビングへ降りて遅めの夕食
を取った後に筋トレをするのだった……。

「俺は絶対お前のそばでそのベースを聴いてやるからな……」

チョコレートと幼馴染

——第3話チョコレートと幼馴染

俺にはこの世の中で愛してやまないものが二つある。

一つはチョコレート、チョコレート知らない人はいないと言ってもいいほど多くの人に人気の食べ物だ。

俺がチョコレートを愛してやまない理由はポキツと音を立てチョコレートが割れる瞬間がなんとも言えないくらいに好きだからだ。

理由はもちろんそれだけではなく子供にも大人にも親しまれている甘いミルクチョコレート、子供には味わえない気品高くふくよかで奥深く、大人っぽいビターチョコレート。などいろいろなチョコレートがあることだ。その数あるチョコの中でも俺が一番好きなのがホワイトチョコレート。

大人になったら上質のカカオで作られたチョコレートを専門店で買い、お酒やコーヒーや紅茶に合わせて少しずつ味わう。という夢をひそかに持っている。

そしてもう一つ大好きなもの——

もちろんご存知の通り幼馴染のひまりだ。

“もの”という括りにしてしまふと失礼な気もするがまあ許してほしい。

ひまりに関して言えばこちらが勝手に好きになっただけなので、ひまりは俺の事どう思っているのだろうか毎日頭を悩ます日々が最近続いている。

ついこの間一緒に下校したときも全然うまくしゃべれなかったし……

まあそれはさておきだな、実はひまりも俺と同様にチョコレートが大好きで昔はよく一緒にコンビニに出た新作のチョコレートを食べ比べしたものだ。

チョコレートに関してはひまりとよくケンカをすることが多い。なぜかというとな俺はホワイトチョコレートが好きなのだが、ひまりはミルクチョコレートが好きだからだ。

有名どころのチョコレートはもちろん、これはミルクチョコのほうがおいしいホワイトチョコのほうがおいしいだの不毛な議論を幼少期から続けている。

逆にミルクチョコレートしか出ていない商品であったりホワイトチョコレートしか出ていない商品であればお互い意見が一致してそれはもう兄妹のように仲良くなる。

残念ながらホワイトチョコのみのチョコはないのだが……

——そして今現在ひまりと俺は絶賛喧嘩中なのだ。

理由はもちろんミルクチョコのほうがおいしいかホワイトチョコがおいしいか、ということだ。

しかし今回ばかりはいつもと違って俺がミルクチョコ派ひまりがホワイトチョコ派に分かれてしまっている。

——遡ること一時間前。

俺がパソコンで某動画サイトでラグビーの動画を見ているときの事だった。

いつものようにひまりが俺の部屋の窓をドンドン叩くところから始まった。

またか……と思いつつもいつも通りカーテンを開くと手にチョコレートをもって満面の笑みでこちらを見てくるひまりがいた。

これにはさすがの俺も反応してしまい、窓をすぐさま開けてひまりを招き入れた。

「じゃーん！ コンビニで新作売ってたからしゅうと食べようと思つて買ってきたよ！」

ひまりが買ってきたのはチョコをしみこませた焼き菓子にさらにチョコレートコーティングした新作お菓子だった。

そのお菓子がミルクチョコのコーティングとホワイトチョコのコーティングされたものだったのがケンカのすべての元凶だ。

もちろんひまりは「しゅうはホワイトチョコのほうが好きだし一応二つ買ってきたよ！ 食べ比べしようよ！」なんて俺を思っ買って買ってきたのだが……。

食べ比べをすればもちろんこっちのチョコのほうがおいしい、なんていう感想にもなるわけで……。

俺もひまりが食べ比べって言った時点で断ればいいのだが、可愛い幼馴染の提案とあらば聞かないわけにもいかないし、せっかく持つてきてくれたのに俺はどうせケンカするからいやだなんてもちろん言えるはずもなく結局そのまま興味本位で食べてしまうのだ。

二つの種類のチョコをお互い吟味して同じタイミングである言葉を口にする。

「今回ののはミルクチョコのほうがおいしいな！」

「ホワイトチョコのほうがおいしいね！」

おや、おかしいな……意見が一致しなかった気がするのだが。気のせいだとは思うが一応ひまりに確認を取ってみる。

「ん？ ひまり今なんて言った？」

「しゅうのほうこそ、もちろんホワイトチョコのほうがおいしいって言ったよね？」

気のせいではなかったようだ。ひまりはなんとミルクチョコではなくホワイトチョコのほうを取ったらしい。

「いやホワイトチョコの訳ないだろ、このシリーズのチョコレートはミルクチョコのほうがおいしいぞ！」

「しゅういつもホワイトチョコのほうがおいしいっていうじゃん！　なんで今回に限ってミルクチョコのほうがおいしいっていうの！」

実は今回俺がミルクチョコのほうがおいしいって言ったのには理由があつて、ひまりに合わせてミルクチョコのほうがおいしいといったのだ。

しかしまさかひまりがホワイトチョコのほうがおいしいというとは思わなかった……計算外だ。

「いや俺はいつもおいしいと思ってるほうを言ってるだけだぞ？　というかそれを言ったらひまりだって一緒だろうが！」

「うう……そ、それはホワイトチョコのほうがおいしかつたからだよ！　私はちゃんと両方味わったうえで言ってるからね！」

「俺だってそうだわ！　結論でミルクチョコにたどり着くだけだからな！」

「なにをー!!!」

「むー!!!」

このままお互い一步も引くことなく意見を譲らないまま時間だけが過ぎていった。

今冷静になって考えたら子のケンカは不毛で何ともばかばかしいのだろうといつも思う。

気づいたころにはひまりは頬を膨らませぶいっとそっぽを向いているし、いつも收拾がつかない状態になってしまっている。

しかし頬を膨らませ拗ねているひまりも可愛いな……これからもこんなくだららない喧嘩をするのもいいかもしれないな。

ってそういうことじゃなくて何とかひまりの機嫌を直さないで。

「まったく……しゆうはなにもわかってないんだから」

なんてひまりがぶつぶつ言っていたがなんのこっちゃわからないので無視しておいた。

「あれ、もうなくなったのか」

お互い終始無言のまま広げられたチョコレートを食べていたが先になくなったのはホワイトチョコレートほうだった。

先ほどミルクチョコのほうがおいしいと言った俺だったが本心はもちろんホワイトのほうなので無意識のうちにホワイトチョコのほうばかり食べてしまっていたらしい。「あれ〜？ しゅうミルクチョコこんなに余ってるのにホワイトチョコなくなるの早くない？ さつきミルクチョコのほうがおいしいって言ってたよね？ しゅうのお口は正直みたいだね♪」

ひまりがニヤニヤしながらこちらを見て言ってくる。なんとも憎たらしい。タツクルでもしてやろうか。

「お、俺は好きなものは最後まで取っておく主義なんだよ！」

「うっそだー！ 私しゅうはいつも好きなものからバクバク食べて嫌いなものはいつまでも残してるの知ってるんだからね!!」

すべてひまりの言ったとおり、好きなものを最後まで残しておくなんて嘘。どうやら幼馴染に嘘は通用しないらしい。何年も一緒にいるんだし、当たり前か。

そんなこといったら俺がホワイトチョコよりミルクチョコのほうがおいしいって言った時も見抜けるだろって思うだろうがそういうところはちやつかりぬけてるんだよね、ひまりは。

まあ、そんなところも可愛いところなんだけど……。

「ぐっ、なんで知ってるんだ。そうだよ、ホワイトとチョコのほうがおいしいと思ったよ

！」

「それはもちろん幼馴染だからねっ！ もー何年一緒にいると思ってるのさー素直じゃないんだからー」

俺の質問にひまりは腰に手をあててエツヘンとでも言いたそうに自慢げな態度をとる。

いやその格好されるとふくよかな……胸が……強調されてだな……俺の理性が持たないのだ。つい胸をツンとしてみたくなる衝動に駆られた指を構えたところでなんとか抑え込んだ。

というか今思ったんだが実際ひまりって高1のバストサイズじゃないよな？ 誰だこんなにくくよかに育てやがって！ ありがとうございます！

「？ しゅうどうしたの？ いきなり両手人差し指したりしたと思ったら今度はひっこめたり」

「ああ、いやなんでもないんだ。ナンデモ」

俺がそういうとひまりは怪訝そうな顔をしてこちらを見てくる、いや、近い近い。

「ほんとになんにもないのー？ ほらー幼馴染なんだし何でも言ってみなよー！」

ひまり胸のサイズいくつなんだ？ なんて言っつていいものなんだろうか……。まあひまりもなんでも言っつていいって言っつたし、俺に責任はないよな。

「なあ、ひまり」

「ん？ なーに？ しゆう」

「あーその、非常に言いにくいんだけど」

俺が言うのをためらうとひまりはまだか、まだかとバタバタし始める。

「もー！ 早く言つてよしゆう！ 気になるじゃん！」

「あー！ もう！ わかつた、どうぞ？」

「うんうんっ！ はやくはやく！」

ひまりはまさに餌を待っていると言われている犬のように今か今かと待っている。

そんな顔をされると今からくだらないことを言うのになんだか申し訳ない気持ちになるからさらに言いにくいんだが……。

まあいい俺も男だ、腹を括つて言うか。

「ひまりの胸つて大きいよな？ 何カツプあるんだ？」

「……………」

辺りを流れる静寂俺が言葉を放った瞬間にお互い沈黙が生まれた。死ぬほど気まずい。というか聞いてしまった事実を今すぐにも消し去りたい。

ああなんでこんなこと聞いてしまったんだ……別にひまりの胸について考えていたってほかのことを質問すればこの場は何とか収められたはずなのに……。

「ア、アハハー。あ！ 私宿題思い出したから帰るね！ バイバイしゅう！」

そういつて立ち上がって帰ろうとするひまり。もうすでに窓に手をかけて開けようとしていた。この場でひまりを帰らせたなら今後一切口をきけなくなる気がしてならない、俺の本能がそういつているのだ。逃がさないぞひまり。

「ちよつと待てよひまり！ ひまりが何でも聞けつて言つたんだぞ！ 俺は何にも悪くない！」

俺はひまりが逃げ出さないようにがつしりとしがみつき言つた。ひまりはもう窓を開け外に出ようとしていたところだったが間一髪で捕まえた。

「ううー私がかえつて宿題するのー！ しゅう離してよー！」

「離すわけないだろ！ ほら！ チョコもまだ残つてるし食べきらないとー！」

「それ全部あげるから！ 私もうお腹いっぱいだから！」

そんな問答を数回繰り返したところでひまりが急に「そうだ！ 押してダメなら引いてみるだよ！」と言ひ出し力を抜いた。

もちろん俺が引つ張つている状態ひまりが前に進んでいる状態だとれていた力のバランスは後ろだけにかかることになるので、俺たちはそのまま後ろへと倒れた。

ドシューーーーーー

「グエツ」

大きな音を立てて地面へ俺の身体は打ち付けられた。2人とも仰向けに倒れたのが幸いしたのか俺が下敷きとなり、ひまりが地面へ身体を打ち付けることはなかった。

「イタタ……つてしゅう！ しゅう！ 大丈夫?！」

ひまりのお尻がおなかに、背中が顔を直撃し頭はもちろん地面に強く打ち付けた。俺はそのまま静かに意識を手放した。最後に聞いた声が幼馴染の声でよかった……。

「つて気なんて失つてないでしょ!」

ピシッとおでこをひまりにたたかかれて再び俺は現実へと帰ってきた。

「いてえな、何すんだよ」

「元はと言えばしゅうがホワイトチョコのほうがおいしいのにミルクチョコがおいしいって言ったり私の胸の大きき聴いてきたり……」

恥じらいから後半はあまり聞こえるような声で言わなかったが大体想像はついた。

「とりあえず今回は全部聞かなかったことにしてあげるから次回から気を付けてよねっ!」

どうやら今回の件いろいろと許してくれるらしい、ケンカもしたが仲直りができてよかった。

そういえば聞いてなかったことがあったな……

「おう、気を付けるわ。で、ひまりの胸の大ききは……」

バツツツツツツツシーーン!!!!!!
「しゅうのバカ！ もう知らない！！！！！！」

俺が事を言いきる前に頬に雷が落ちたかのようなピンタを喰らった。このあと3日間頬のみじ跡が消えることはなく俺はもうひまりの前で胸の話はよそうと決心した日だった……。